



藤田 哲也

渦の爪—たつまき



はじめに

私が渡米して、たつまきの研究を始めたのは昭和 28 年の夏。もともとは気象解析の研究が目的だったが、日本ではあまり聞いたことのない“たつまき”が、アメリカでは毎日のようにどこかで起こっているのを知って驚いた。驚きはいつのまにか研究心になり、おもしろい たつまきがアメリカ各地に起こるたびに、被害の現地調査をしてみた。

アメリカでたつまきの研究を始めてから、調べてみると母国日本でも、その国土の大きさを指標とすると、かなりのたつまきが起きていて、しかも次第に増加の傾向にあることを知った。私は、おりをみては帰国し、日本のたつまき被害の調査や記録の分析を行ない、ますます、たつまきの研究に熱を入れることになった。

日本では、一般にたつまきのことはほとんど知られていない。前号（5月号）で紹介したグラビアやこの小文が“たつまき”への興味と関心をさそうことになれば、こんな嬉しいことはない。

1. 世界のたつまき、日本のたつまき

アメリカのたつまきは、強さも数も世界一で、年平均 800 個。かといってほかの国にないわけではない。知らぬが仏で安心していた国々で、最近になってたつまきが年々増加している。日本の面積当たりに直した年平均は、イギリス 29 個、ニュージーランド 23 個、たつまきの本家アメリカは 38 個。

発生数の絶対値では確かにアメリカは世界一だが、上述の相対値でみると、ばかにならない数といえよう。

さて、日本のたつまきの年平均、1950 年が 5 個、'60 年 10 個、'70 年 15 個と、物価や GNP なみに、上昇の一途をたどっている。昨年、1972 年には、なんと 21 個も発生。九州から北海道までの各地に点々として、たつまきの爪跡がみられる（図 1）。

図で、東京をとり囲むたつまき地帯に注目してほしい（図 5 参照）。東京西郊の光化学スモッグの局地的発生ほど事態は深刻といえないまでも、新しい都市型の災害現象の発生である。1971 年 7 月 7 日、東京の北、浦和・大宮両市を襲ったたつまきは、“アメリカのたつまき番付でも、トップの 5% にはいりそうだ”というのが、ヘリコプターで被害地を調査した筆者の印象である。

* T. Fujita: Violent Vortex—Tornado
カット写真は伊豆大島沖の海上たつまき（1955. 2. 1）
宮内紀雄氏撮影

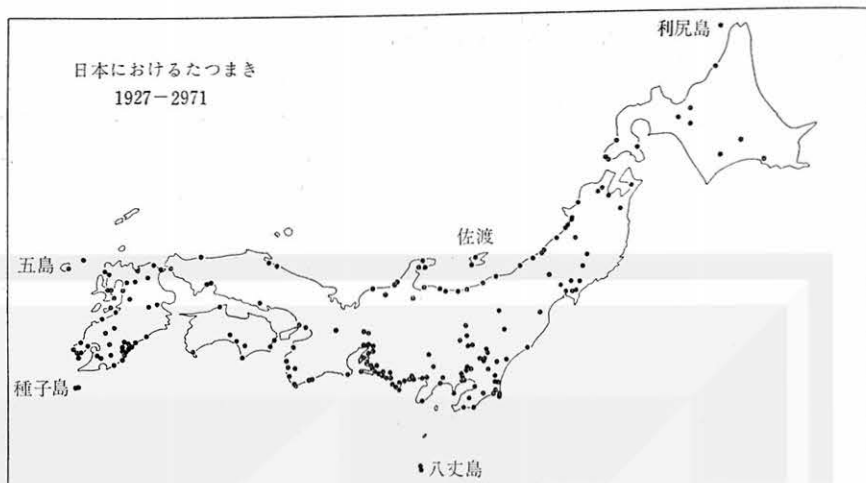


図 1
日本に発生したたつまき
(1927~1971)

2. たつまきのミステリー

たつまきの被害は、グラビアでも紹介したように、ミステリーじみた現象を残す。アッというまにやってきて、瞬時に去っていくたつまきの直径は、わずか数メートルか数百メートルしかない。しかし、その風速は台風以上のことが多い。小さい円周を高速度で回る風——円心力で飛び出し、ひろがろうとする空気の流れをひきとめる役をするのが、渦の中心部の気圧で、強いたつまきの中心示度は台風より低い。この強い渦と低い中心気圧が、ミステリーの秘密なのだ。

- ・秋田県各地で発生したたつまきで、窓ガラスに円や長方形の穴がくり抜かれた。窓ガラスは割れなかった。
- ・青森県むつ市のたつまきで高校がやられ、380 平方メートルの窓ガラスがメチャメチャ。破片は全部外側に飛散し、内部には残らなかった。
- ・ソビエト。たつまきが見えたので家にはいろいろと入口の戸を一生懸命に押したがダメ。窓ガラスが外向きに飛び散ったとたん、戸が開いた。
- ・シカゴ市。シャワーをあびていた子どもが、突然できた壁の割れ目から吸い出され、地面にたたきつけられて大けが。

これらは、いずれもたつまきが近づくと、強い風と気圧の低下が起こることを物語る。低気圧につつまれた家の中には、たつまき以前の空気が充満しているから、ひとたまりもないわけだ。

このような、強い渦と低い気圧にものをいわせた偶然と確率のいたずらを、もう少しあげてみよう。

- ・浦和市の畑から、大根が次つぎに引き抜かれ空中に舞い上がった。
- ・生きた鶏の毛が抜き取られ、まる裸にされた。鶏は生きていたり、死んでいたり。
- ・豆が高速度で卵にぶつかり、殻をこわさず穴だけあけて中心に飛び込んだ。

- ・音もなく屋根がはがされ、気がついたら星空が見えた。家の中の調度品は手つかず。
- ・たつまきの中で浮き上がった自動車のブレーキがきかずに冷汗。着地したとたん、ブレーキは完全になおった。
- ・割箸が電柱に突きささったり、角材が 16 ミリもある鉄板に突きささったり。
- ・たつまきで 2 つに割れた大木の幹に、吹き飛ばされた自動車が飛び込み、割れ目がしまって自動車をはさんだ。

現象の 1 つ 1 つは、たしかに後日調査する人間どもをおどろかす。よく考えてみれば、たつまきは自然科学の法則に従ってふるまっているだけのこと。“不思議と思うのは人間が無知だから”とせせら笑っているかもしれない。しかし、後述する「人工たつまき」の実験では、こうした状態を再現し、渦の秘密を少しずつ解き明している。

3. たつまきの構造と発生

日本での“たつまき”という名前は、その形が雲をよんで昇天する竜に見えたからであろう（竜はもともと“たつまき”のイメージから発した中国の想像の動物。“たつまき”のことば自体も中国の“陸竜捲”によるもの）。アメリカは象の鼻、ソビエトでは大蛇、ドイツではズボン、南米では袖などという。いずれも渦の中にある、奇妙な形に注目していろいろと呼ばれている。たつまきの特徴づけるのは、まさにこの渦の中心線に沿って現われる細い水滴の集団——つまり雲である。

水滴は渦の中心付近の低圧部に湿った空気が巻き込まれてできたもので、その無数の水滴は、親雲からちょうどジョーゴのような「ロート雲」を形成する。

たつまきが強まれば、ロート雲の下端は地面に近づき、ついには地表や水面に達することもある。コップに入れた水を箸でかき回すと中心に渦ができる。激しく回せば

回すほど、渦は下へのび、ロート形の渦になることは、たいていの人が経験しているはず。これが視覚的現象でのたつまきの実態だ。

視覚的にといったのは、図2にみるように、たつまきの渦自身はロート雲の外径よりもずっと遠くまで広がっていて、それは大渦にとり囲まれているからである。大渦の直径は、たつまきの数十倍もあるが、風は弱い。

つまり、たつまきの発生は、まず大きな渦の流れがあり、その上空に発生した雲が発達し、その雲（親雲）が大渦の中の空気を急速に吸い上げることによる。そして、中心の示度の低いところに、親雲からロート雲が下がってくる。

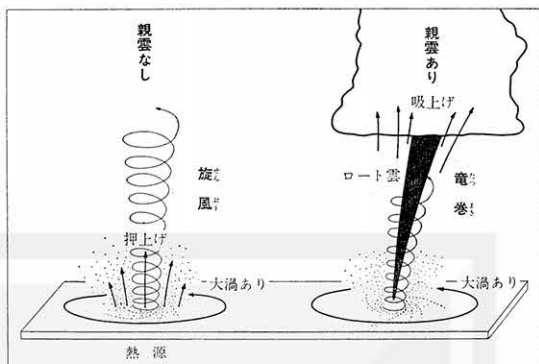


図2 たつまき（竜巻）とせんぶう（旋風）の発生機構

4. 似て非なるもの一旋風

●せんぶうとは

たつまきと似た現象に「せんぶう（旋風）」がある。目に見えない空気の渦という現象は似ていても、その発生の機構は図2にみるようにまったく違う。旋風には親雲はなく、大渦の中の空気が吸い上げられる代わりに、押し上げられて発生する。

押し上げの起こる主な原因は大渦の中の地表が暖まったり、熱せられたりすることで、急な上昇気流が引き金になる。真夏の日中、乾燥した畑や運動場で砂を巻き上げる「ほこり旋風」がその一例である。また火山が爆発し、溶岩流が広大な斜面を被うと、その上に「煙旋風」が何本も発生。立ち上った煙の柱が回転しながら動いていく。

「山旋風」もしばしば発生する。富士山に強い西風が吹きつける主として冬の季節、6合目から9合目にかけて発生。5合目またはそれより下にまで降りてくることがある。キャンプ中のテントや、雪上訓練中の山男が吹き飛ばされる事故は、突風だけでなく山旋風も原因しているはずである。突風だと吹き落とされ、旋風だと巻き上げられて飛ばされる、というのが被害の違い。瞬間的な出来事だが、注意して観察すると、富士山にも、いろいろなことが起こっている（図3）。

●たつまきと旋風の因果関係

大正12年9月1日、関東大震災の直後、東京・横浜などに、一時に多くの地点で火災が発生し、結果的に広大な地域が火の海と化した。江戸時代の「振袖火事」もそうだったのだろう、火災地域に次々と旋風が発生し、火の粉や燃えさかる品物を巻き上げて遠くへはこび、延焼、飛火に一役買った。この「火事旋風」は東京に111個、横浜にも30個以上の発生が記録されている。

地震後の火災が広がるにつれて上昇気流が強まり、東京・横浜の上空に雲が発生。発達した入道雲が火事場からさかんに空気を吸い上げ、たつまきが起こり、それは

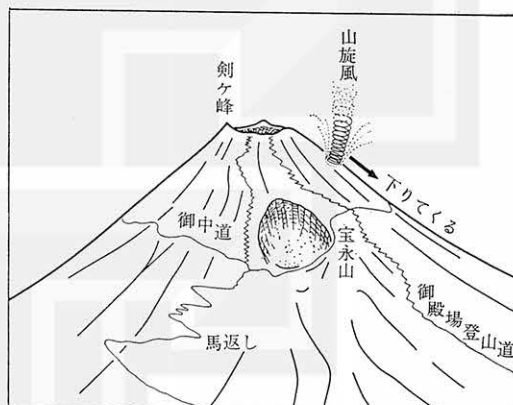


図3 富士山に発生する山旋風

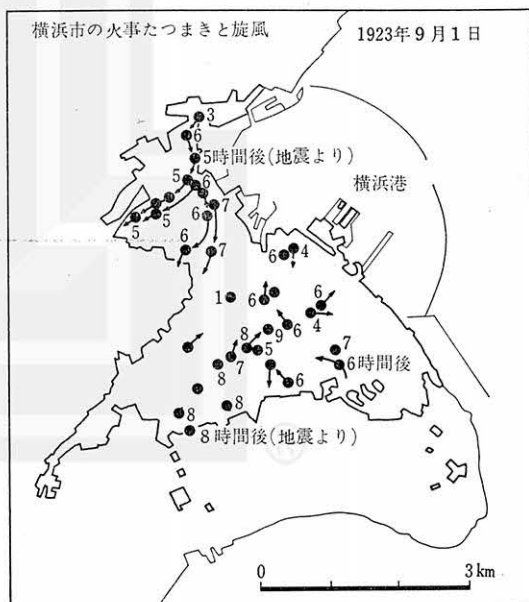


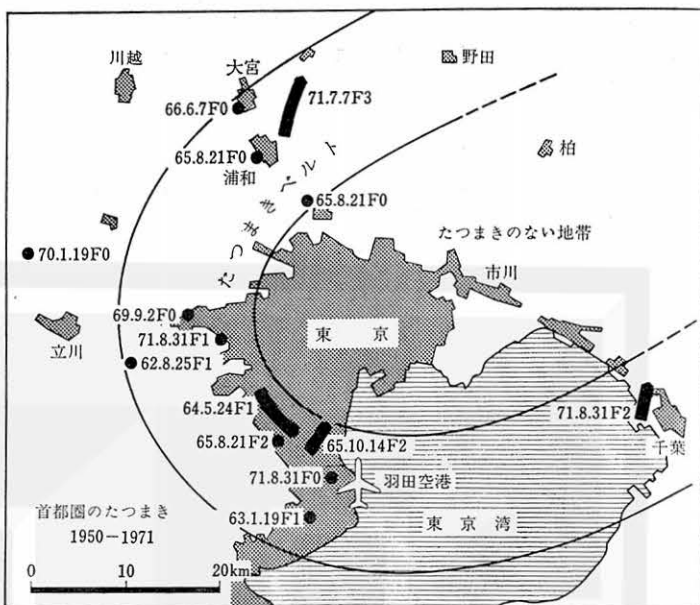
図4 横浜市の火事たつまきと旋風（1923年9月1日 関東大震災の日）

図5 首都圏のたつまきベルト

図中のF0, F1などはたつまきの強さのスケール。
1から5の5段階にゼロを加えた「藤田スケール」で、略してFスケールと呼ぶ

表1 Fスケール

スケール	名称	木造住家の被害
F0	微弱なたつまき	ちょっとした被害
F1	弱いたつまき	瓦が飛ぶ
F2	強いたつまき	屋根をはぎとる
F3	強烈なたつまき	倒壊する
F4	激しいたつまき	分解してバラバラになる
F5	想像に絶するたつまき	跡形もなく吹飛ばす



親雲になった。親雲の作ったたつまきと、火事旋風のダブルパンチに見舞われた火災地域では、人びとや荷車まで巻き上げられたという(図4参照)。

5. 日本のたつまき地帯

●その概観

日本にもたつまきのよく起こる場所がいくつかある。もっとも目立つ場所は図1からもわかるように宮崎平野、東海道。そして最初に述べた東京郊外にひんぱんに起こりはじめたことも、興味ある局地気象の一例。

図から、たつまきが好んで発生したり、上陸する場所が、海岸沿いに目立つ。秋田県昭和町、秋田市、本荘市、酒田市、佐渡郡川、新潟から糸魚川をへて黒部市までの海岸、能登半島、福井県三国町、長崎県諫早市、薩

摩半島枕崎市、宮崎市、四国へ飛んで高知市、和歌山県御坊から田辺までの海岸、新宮市、豊橋市、浜松市から静岡までの海岸、千葉県鴨川町、飯岡町、銚子市。

一方、日本特有の「山たつまき」は、独立した火山からおりてきたり、また裾野で発生し、次の火山が山たつまきを起こしている。北海道利尻岳、八丈富士、富士山、九重高原黒岩山、雲仙岳、五島火岳。

●たつまきベルト

宮崎平野には、1950年から1971年の22年間に25個のたつまきが発生。わずか800平方キロのデルタ平野はまさに「たつまきの巣」。日本の面積に割り増すと年当たり発生数は520個になり、本場のアメリカも数では顔負けとなる。宮崎空港付近が特にねらわれるらしい。空港の北、南、西のすぐ近くに発生した記録がある。

空港といえば、羽田国際空港は東京都を馬蹄状に囲むたつまきベルトに位置する。この首都圏たつまきベルトは図5のように江戸川上流の野田から浦和、武蔵野、世田谷、羽田をへて、千葉市に至る幅15キロ、延長約100キロの馬蹄形の地域。面積1,500平方キロの中に、年平均1.3個発生している。日本の面積に割り増しすれば年当たり500個で、発生率は宮崎平野なみ。

不思議なことに、たつまきベルトに囲まれた内部の地域にはたつまきは発生しないらしい。過去23年間に、都心にはたつまきの記録はない。

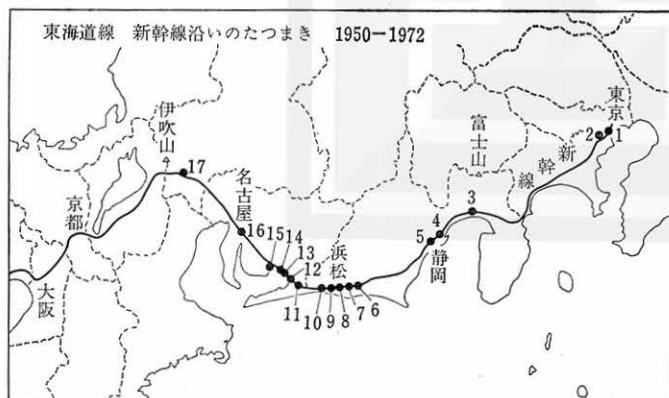


図6 東海道線、新幹線沿いのたつまき地帯

ベルトに発生する原因は、マンモス都市の「熱の島化」にあるらしい。郊外より高温の都心では空気が一様に上昇、雲は発生しても大渦は起こらないらしい。たつまきベルト帯内にある郊外では、都心の暖い空気と市外の冷い空気が小規模な前線をつくって接触。前線帯には多かれ少なかれ渦があり、それを雷雨が吸い上げてたつまきが発生するらしい。

前述した関東大震災での「火事たつまき」や「火事旋風」は、熱の島の中の「火の島」の発生からその原因をさぐることができよう。

●日本の動脈とたつまき地帯

東海道線新幹線沿線もたつまき多発地帯。東京～新大阪間 553 キロの両側 1 キロを新幹線地帯とすれば、延面積は 1106 平方キロとなる。過去 23 年間 (1950～72) にその地帯を通り抜けたり、そこで起こったたつまきの数は 17 個 (図 6)。日本の全面積に割り増した年平均の発生数は 250 個。ぶっそうな話である。

この東海ベルトのたつまきは、発生率からいうと宮崎平野や、東京のたつまきベルトに比べると半分だが、時速 210 キロでほぼ 15 分おきに走っている列車の直前をたつまきが横切ったらどうなるか？ 弱いたつまきならば、列車の通過後にはこりの渦と化したたつまきが息をひきとって消えてしまうだろうが。

始末の悪いのはむしろ中級のたつまき。生まれつき巻き上げることの好きなたつまきは、進路上にあるものを片っぴしから失敬し、巻き上げては放り出す。線路上に落ちれば、排障器にかからない小物ではなおさら、列車のスピード次第では事故につながる。事故は予測できないから事故なので、たつまきにぶつかることはまずないと仮定するより、その性質をよく理解して万一の場合の対策を考えるのが、合理的方法と思われる。

東名高速も、東海道のたつまき多発地帯を通っている。時速 80～100 キロで走る自動車は、弱いたつまきの横風を受けても道路外に押し出される。その後の運命は、車のスピードと道路わきの地形が決定。まさに瞬間の出来事である。

山陽新幹線は、たつまきに関する限り、もっとも安全なところを走っているらしい。過去 23 年間に新大阪～岡山間の両側 1 キロ以内に起こったたつまきはゼロ。この傾向が続けば、山陽新幹線では「たつまきの心配なし」ということになる。

6. 人工たつまきの実験

たつまきは、一度起こると局地的にかなりの被害をもたらす。しかし、めったに見られない現象だし、まして台風観測のように研究者が直接観測できることはまずな

い。実験室で再現して観察するにこしたことはない。

1) 実験室でつくるたつまき

たつまきの特徴はこれまでに述べたように、中心示度の低いこと、ロート雲を形成すること、そして親雲が存在すること。

中心示度の低いたつまきを作るには、渦の回転速度を増すことである。渦の中の気圧降下は、回転する風の速さの 2 乗に比例することが知られている。

問題はロート雲。中心近くで水蒸気が凝結してロート雲ができるほど強力な「人工たつまき」を作るとしたら、研究者や実験装置が、人工たつまきに吹きとばされてしまうだろう。

したがって、実験室では本物そっくりの渦を小型につくってもあそびわけにはいかない。ロート雲はあきらめて渦の部分だけをつくり、その性質を調べることになる。もともと空気の渦は目に見えない。何らかの発煙装置を使い、渦の形や動きが見え、また写真に撮れるような工夫が必要。

次に、たつまきと旋風を根本的に区別する親雲。前述のように、たつまきは、地上付近の大渦が雲に吸い上げられて発生する。実験装置にも親雲の模型が必要である。シカゴ大学内の筆者の実験室では、親雲装置を作るのに一苦勞した。余談だが、たつまき被害のかかなりあるアメリカだから金を出してくれ、1 年間の研究費は約 25 万ドル。円切りの時価で約 6000 万円である。

2) 手軽につくれる実験装置

親雲のない旋風は手軽に作れる。必要なものは地上付近の大渦の流れと、下から空気を押し上げるための加熱装置だけ。比較的安くつくれる旋風の実験装置や、たつまき実験の方法を紹介しておこう。

A. 湯湯と扇風機を使った湯気旋風の実験

次ページ図 7 が装置。平たい円形の器に水を入れ、底から加熱すると、水面上の空気は上昇を始める。水が暖まるとさかんに湯気が立つ。湯気は凝結した水蒸気——微粒子の集まり。空気とともによく動き、器の上の空気の流れを手にとるように見せてくれる。

とはいっても、水面のあちこちに湯気の小柱が立つぐらいで、旋風に似た渦巻きの柱は起こりにくい。つまり、水面上に発生条件としての大渦がないからだ。

弱い扇風機で器の横から風を当ててみよう。風はほぼまっすぐに吹き、きれいな形の大渦はつukれない。しかし、風の側面には不完全な大渦ができ、湯気の雲がところどころ回転し始める。まっすぐに、よわよわしく昇っていた湯気の小柱が、回転する円柱に変わり、数秒～数十秒も生きのびる。これを「湯気旋風」と名づけよう。

B. 丸い筒を利用した煙旋風の実験

図 8 のように、大きな丸い筒の下部に空気の取り入れ

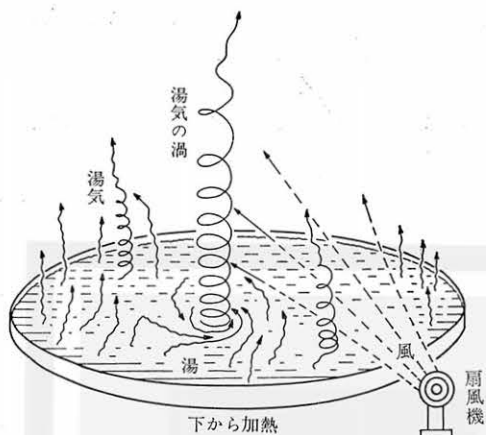


図7 湯湯利用の湯気旋風実験装置

口をつくり、はいる空気が筒の底で大回りの渦をつくるようにする。筒は高いほど強い上昇流が得られて好都合だが、とびきり高い必要はない。

空気取り入れ口は円筒の接線方向に、2, 3, 4 と好きな数つくればよいが、1つではまずい。

筒の底を加熱する。筒の中の空気は暖まり、アルキメデスの原理で浮き上がり、上から逃れようとする。それを補うため空気取り入れ口からは自然に空気が流入し、底で大渦を巻きながら、上昇するチャンスを待つ。

空気取り入れ口には、適当な煙発生装置（線香など）をつければ、煙は空気の流れにのり、大渦が暖まって上昇するとき、筒の中心近くに高速度で回転する煙の渦ができる。

観測は筒の側面ののぞき穴から行なう。筒の中は暗いから、筒内に豆電球をつけるか、鏡で上から光を入れるとよい。筒の内側を黒く塗れば、煙の渦は浮き立って見えるはず。

以上は実験のアイデアを示しただけ。設計、作り方によって、できる渦もいろいろである。設備の整った工作室があれば、ガラスの筒や、アクリルパイプ（断熱に注意）を利用し、空気や煙の取り入れ方法を工夫した装置で、みごとな煙旋風を生みだせる。

C. 親雲をつくってたつまきをつくる実験

たつまき実験のポイントは親雲装置。親雲が大渦を吸い上げるので、地面は常温のままで加熱の必要はない。何らかの方法で地表を大きく旋回する大渦をつくり、それを親雲の模型（つまり吸い上げ装置）に吸い上げさせれば、たつまきができ、渦は親雲へ巻き上がっていく。図9にその一例を示す。

大渦をつくるいちばん簡単な方法は、偏向板の利用。風の流れを止めずに、方向だけ変えるための偏向板は多いほどよい。6枚～12枚が適当で、高さは10センチくらい。所どころに発煙装置をおいて、風の流れを調べる。

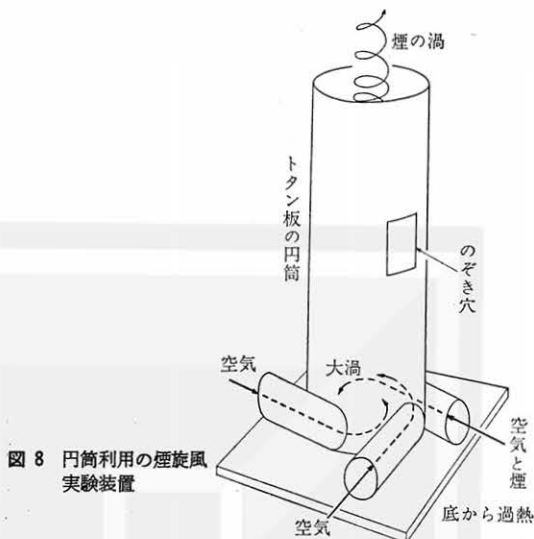


図8 円筒利用の煙旋風実験装置

親雲模型の空気吸い上げ装置は、強力な掃除機でもよいだろう。力不足ならば、モータ付きの換気装置。親雲装置の吸引力が強ければ、できるたつまきも強い。吸い上げる空気が横からはいらぬように、目の細かい金網の円筒をつけるのも、工夫のひとつ。

吸い上げる力をいくら強くしても、たつまきの中心示り下がることはないことは前述のとおり。せ度があまいぜい、ゴミやミニカーを巻き上げる程度で、ロート雲の発生までは望めない。

*

前号のグラビアに示したように、シカゴ大学の実験装置がつくる人工たつまきは、家や列車の模型を巻き上げる。巻き上げるのはほんの瞬間の出来事。この人工たつまきは倉庫の中からミニカーを吸いだしたり、弱い屋根をはぎとったり、小さくても本物の真似はけっこうやってのけ、実際に起こる被害状況の判断に役立っている。

水面上に弱い人工たつまきを導くと、中心付近の水面

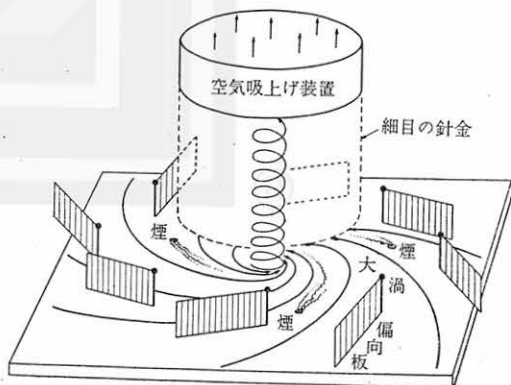


図9 親雲模型をもったたつまき実験装置

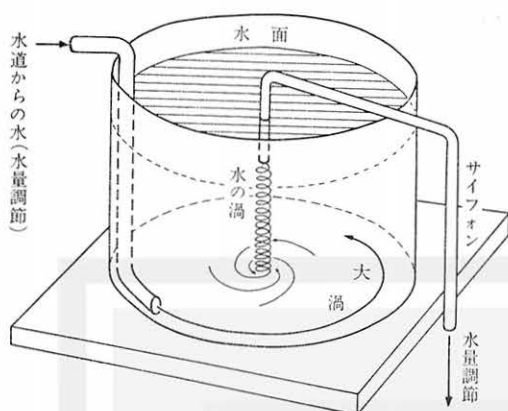


図 10 水流利用のたつまき実験装置

がやや盛り上がる。渦を強めると水面が荒れ、しぶきが飛びはじめ、あたり一面に水滴をバラまくようになる。

ところが、いくら渦を強めても、たつまきは水を吸い上げない。ソーダ水を飲むときのストローの役を、たつまきがやと思っていたのは、視覚的観測から推測していた昔のこと。水上のたつまきは、海面上にしぶきの雲をつくり、空気とともに巻き上げられるのは、大粒、小粒の水滴だけである。

英語では水上たつまきのことを“Waterspout——水のじょうご”というが、それはただ、ことばの上のこと。真空でも 10 メートルしか水を吸い上げないのだから、水上たつまきが水の柱であるわけではない。

D. 水を使ったたつまき実験

空気の代わりに水を使えば安上がりで、たつまきに似た渦をつくることができる。必要なのは図 10 のように、円形の水槽と 2 本のパイプ。ガラス細工の設備があれば、ガラス管を図のように曲げるだけで準備完了。

水道の蛇口と水取り入れ用の管をゴム管でつなぎ、ピンチコックなどでゴム管をはさみ、流入量を調節する。

水の取り出しは水槽の中心上部。サイフォンになるように直角に 2 回曲げたガラス管の末端にもゴム管をつなぎ、はいる水と出る水に巧くバランスを保たせ、適当な水面の高さを維持する。

流入パイプの吹き出し口を水槽の底におろし、吹き出す水による回転力で、水槽内にはたつまき発生に必要な大渦ができる。ここでは、水槽中央のサイフォンの吸い上げ口が、親雲の吸い上げ機構になる。

大渦の水は、サイフォン直下の水槽の底に旋回しながら集まり、渦巻きながら上昇する。渦が強まると中心付近に気泡がはいり、白い粒子が上がったり下がったり、複雑な渦の中の流れを見せておもしろい。そのまわりを水のたつまきが巻き上がっていく。

水は透明だから、インクを流すかアルミニウムの粉末

を混入すれば、水の動きがよく見える。強い光を横から当て、特に光束をしばれば、部分部分の観察に好都合。光の当て方の工夫で、たつまきのいろいろな姿を観察できる。手軽で興味深い実験方法である。

*

たつまきと旋風を実験室でつくる 4 つの方法を述べた。このほかに、ジョーゴや水槽の底の小穴から水を流し出す簡単な実験から、シカゴ大学の複雑な装置に至るまで、規模も経費もさまざま。創意と工夫によって、いろいろな姿をした人工たつまきがつくりだされるだろう。

おわりに

たつまきの実験を通して学ぶことのできるのは、渦の性質。低い中心気圧と強い回転風速がもたらす、意表をつく破壊力。我が家が全壊しても、隣家はまったく無事という局所的な被害も、たつまき被害の特色である。

たつまきは回転方向によって男性たつまき、女性たつまきと区別される。北半球では 90% 以上のたつまきが、反時計方向（プラス方向）に旋回する「男たつまき」が大多数。北半球では珍らしい「女たつまき」は日本でも富士吉田、千葉県飯岡付近に発生の記録がある。

赤道を越えて南半球にはいると、ニュージーランド、オーストラリア、南米、南アフリカなど、そこには「女たつまき」の国々がある。女たつまきが優勢なこれらの国々では、「男たつまき」は影をひそめ、弱いやつがこっそりと発生しているらしい。

このように、世界のたつまきを調べてみると、渦の性格、発生状況などが実に変わっている。792 人を殺した強烈なたつまきがあると思えば、テレビのアンテナ 1 本をへし曲げてたつまきの戸籍に入れてもらった例もある。発生も実に気ままに規則性がない。1 つの町が 3 年続けて、しかも同じ日の午後によられて、その後 35 年間もたつまきが現れないとか、60 年間もまったく起こらなかった場所に突然おそってきて町民が肝を冷やしたなどという話も聞く。たつまきの世界では、“でたらめ”な発生が常識で、平均値や傾向を知ろうとする人間どもの意表をつくことが多い。

このように、いろいろな性格を示し、また正体のつかみにくい“たつまき”を研究するには、人工たつまきがいちばん手頃である。読者の創意によって、新しい「たつまき実験装置」が開発されることを希望する。

参考文献

- 関谷 博「竜巻—気象解説叢書(5)」(気象協会)
藤田哲也「たつまき(上)—渦のメカニズム」(共立出版 科学ブックス(編集集中))

ふじた てつや/シカゴ大学教授

怒りを 真の敵へ

フィルターフィルターフィルター

日本人はいったい辛抱づよいのか、それともばかなのか、ちっともわからないといった人がいた。これだけ公害が拡がり、投機や買い占めによってこれだけ物価が上がっているのに、人々はただぶつくさとぐちをいい、自分だけのその日が何とか過ぎせればいいと思っているらしい。ほんとに悪いのはだれか。こういうときに何の手も打てず、むしろこうなった原因を作り出している政府こそが真に悪いのだというふうには考えない。

そういうと何でもかんでも政府が悪いことになるし、また実際そうもいえるのだが、政府というヤツは実体がどこにあるのか見当がつかない、まことにやっかいな代物なのである。代表者の総理大臣をつかまえて文句のひとつもいってみたいが、われわれ一庶民にとって、かの田中角栄氏に会うことなどできっこないのだ。だからといって、そのへんの役所に行つて役人のひとりにでも会ってみても、何のらちもあかないこと、いうまでもない。

近ごろ、そういう点でおもしろかったのは、大工さんたち、建築労働者の人たちが、商社にどなりこんだことである。材木が商社に買い占められてものすごく値上がりしたために、家を建てようとする人々も困ったが、実際に家を建てる側の大工さ

んたちも困った。商社がほんとに材木を買い占めているのかどうか、値上がりの原因が別のところにあるのか、そんなことは知っちゃいない。新聞もテレビも雑誌もそういつているのだから、そうにちがいはあるまい、というわけで大工さんたち、商社にどなりこんだ。

商社の課長クラスの人が応対に出て、どなられて青ざめた顔をひきつけていたなどと、またまた新聞は写真入りで書きたてて、読者はざまあ見ろと、少しばかり溜飲を下げた。議会に呼び出された大商社の社長連中、ばかみたいに買い占めの事実はないなどいつているが、その一方で米の買い占めの事実が次々と暴露されていく。

つい先日のお食用油の汚染の事件でも、最高責任者の社長が、油の汚染されていることを承知で出荷の指示をしていたことがバレた。水俣病のチッソという会社が、事実を知りながらとことんかくそうとしたなど、こういうことが続いている、もう国民は企業のいうことなんかけつけて信じやしくなりました。ただ、こういう割にはきりした相手があるときは、国民の怒りもぶつつけやすい。特に直接の被害者にとっては、相手が目の前にいればけんかもできるというわけである。国鉄高崎線の上尾駅でのさわぎもそうだった。

しかし、現に悪いことをした会社をやっつけるのはまだいいとしても、労働者が正当な権利として闘争を展開しているのに、同じ労働者たちが、ただ自分の乗る電車が混むとかおくれるとかで、運転手や車掌に乱暴を働くのはどうかと思う。それはさぞいらいら、むしゃくしゃするだろう。怒りたくもなる。しかしその怒りを向ける相手がちがいやしないか。

ほんとうの敵はいったいだれなのか、こういう事態を招いた真の責任者はだれなのか。このような時代は、ひとりの人間が急に作ったのではな

く、長い間かかってできてきたものである。それは文化といってもよいだろうか。日本の文化、特に精神的な文化は戦前と戦後とで大きく違った。戦前の考え方には、自分自身以上の何ものかに自分を捧げるという思想があった。その相手が天皇を中心とする国家であったのだが、戦後はそういうことがすっかりなくなり、人々はもっぱら自分自身のためにだけ行動することとなり、しかも、それが最もよいことであって、自分以外のものに奉仕するなんてことはばかげたことだという考えが拡まった。人間にとってもっとも基本的な価値観が、このように自己中心的・個人主義的になってしまったのだから、世の人すべてが自分さえよければ他人などどうなってもかまわないという考えに染まってしまっている。高度成長とか、豊かな社会とか調子のいいことをいつているが実はこんな時代を作り出してしまったのである。その張本人はだれか。

たしかに日本人は辛抱づよい。そしてけしてばかではない。だからもう少し辛抱づよく、じっくりと真の敵を見定めて、目の前の、ほんとうは仲間である相手とのつまらぬけんかをやるわけにはいかないのか。学生たちの内ゲバをみても、大学当局を相手にした国立大学の授業料値上げ反対闘争も、相手がちがいでせんかといいたくなるのである。

フィルターフィルターフィルター

やじうま